

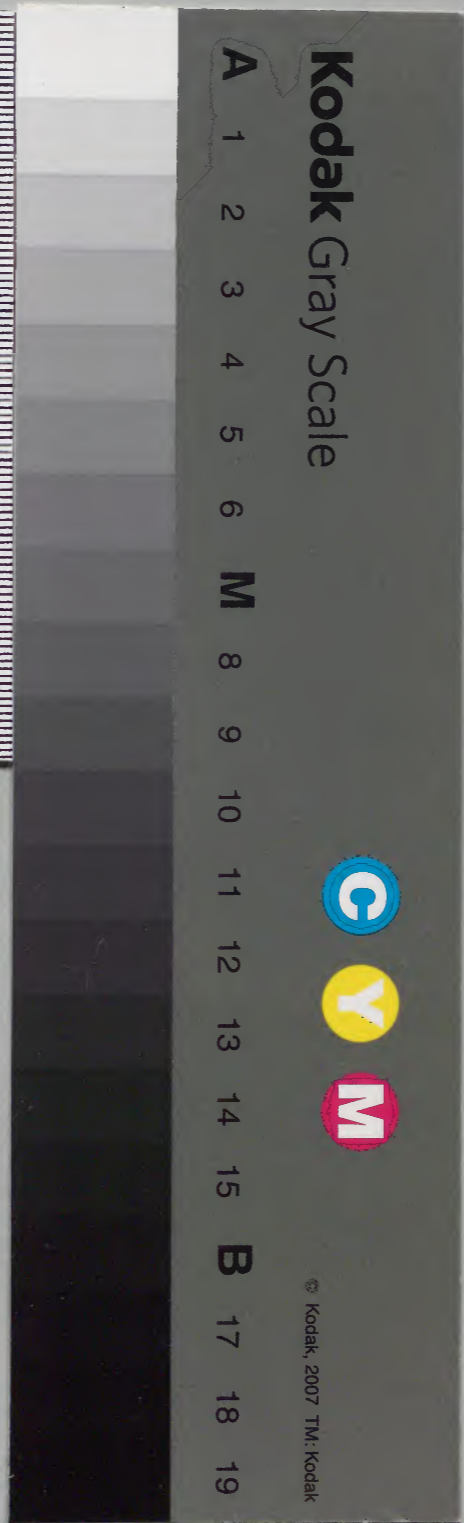
官刻 孝義錄

筑前上

冊三

庫文門内	
五七	和書
五四	類
五	冊
〃	號

内閣文庫	
番號	和 11141
冊數	50 (43)
函號	157 397



孝義錄卷之四十三

奇特者

松年筑茶音領分
糟屋於上中原

奇特者

同領
宋像於田隈村

奇特者

同領
宋像於地嶋

奇特者

同領
遠賀於野間村

奇特者

同領
遠賀於黒山村

忠義者

同領
同所



筑前國上

唐屋

百姓

九條若島娘

百姓

百姓

助次郎

延寶二年
慶長

差一

二

先祿二年
慶長

差一

先祿七年
慶長

新九郎

先祿九年
慶長

三

同時
慶長

孝義錄卷之四十三

奇特者 同領 穀手那四郎九村

孝行者 同領 志摩那米系者

奇特者 同領 素隅田 給如 糟屋那尾仲村

奇特者 同領 鞍手那水系村

奇特者 同領

奇特者 同領

孝行者 同領 遠賀那中系村

孝行者 同領

孝行者 同領 穂波那内住村

孝行者 同領 鞍手那上那入村

孝行者 同領 鞍手那勝野村

貞良者 同領 遠賀那本吉村

奇特者 同領 早良那田崎村

孝行者 同領 宗像那武丸村

孝行者 同領 怡土那井田村

孝行者 同領 博多領崎町

宏公

百姓

百姓

百姓

孫四郎

百姓

陸陽師

休白孫百姓

三郎右馬 元禄九年 癸亥

正七 年不知 癸亥

九郎左衛門 元禄十一年 癸亥

孫四郎 元禄十一年 癸亥

平次郎 同時 癸亥

休白 同時 癸亥

熱一 元禄十一年 癸亥

全七

六助

又次郎

元禄十六年 癸亥

正助 元禄二年 癸亥

三七 元禄三年 癸亥

熱三浦 元禄十年 癸亥

古今事類考卷四十三

○孝行者 同領 福岡城下緋谷町

○孝行者 同領 糸須那井本高

○孝行者 同領 同所

忠孝者 同領 胎土那井系村

○兄弟睦者 同領 志摩那志田村

○兄弟睦者 同領 志摩那新田村

孝行者 同領 穗波那馬友村

孝行者 同領 早良那姪濱

孝行者 同領 福岡城下曾六

奇特者 同領 家来

孝行者 同領 鞍子那野面村

孝行者 同領 福岡城下高只山下

○負意者 同領 那珂那藥院西

孝行者 同領 福岡城下銀治町

奇特者 同領 鞍子那本月村

奇特者 同領 鞍子那本至領高

孝義錄卷四十三

黄

町人器師

鞍崎加右衛門

加右衛門妹

百姓七左衛門下男

半七

百姓

惣七郎

惣七郎

清次郎

庄屋

又三郎

町人清賣

享保十七年

八平

四十二歳

享保十二年

享保十六年

六十歳

同時

町人兼種屋

西村文助

山奉行下役

清系八郎

百姓助七候家

中ん

元文四年

町人佐勢不長助妻

上ん

百姓羽助候家

里ん

町人源治惠妻清伴

常五郎

元文五年

百姓酒造

源七

元文五年

町人酒造

源次郎

年歳

三

孝行者

同領 鞍手那木屋領石

孝行者

同領 穂波那九那丸村

孝行者

同領 福岡城下上名崎町

孝行者

同領 遠安那内浦村

奇特者

同領 遠安那木吉村

孝行者

同領 宗像那武丸村

孝行者

同領 怡土那王丸村

孝行者

同領 福岡城下材木町

孝行者

同領 糟屋那若松村

孝行者

同領 博多野町

奇特者

同領 鞍手那植木村

孝行者

同領 那珂那下警固村

孝行者

同領 志摩那玄思坊

孝行者

同領 博多福屋町

孝行者

同領 福岡城下唐人町

孝行者

同領 福岡城下藥院町

町

町

町人那木屋七牌

無田百姓

百姓

無田百姓

百姓

町人那木屋行敷

百姓

町人青賣

店名

百姓日産稼

職師

山伏

町人挑灯屋

町人日産稼

清一

元文五年 慶長

後三

三二歳

元文五年 慶長

三石

三二歳

寛保元年 慶長

助六

三二歳

延享四年 慶長

岩作

三二歳

寶曆二年 慶長

次七

三二歳

寶曆十二年 慶長

若七

三二歳

寶曆十二年 慶長

艾四郎

三二歳

明和二年 慶長

甚五

三二歳

明和四年 慶長

与吉

三二歳

明和四年 慶長

岩七

四二歳

明和四年 慶長

元助

三二歳

安永二年 慶長

岩次郎

五二歳

安永四年 慶長

金剛院

五二歳

安永五年 慶長

若右衛門

五二歳

安永五年 慶長

兵次

五二歳

安永五年 慶長

孝行錄卷之四十三

日

孝行者

同領 福岡城下湊町

孝行者

同領 那珂那桑院村

忠義者

同領 博多祇園町

孝行者

同領 博多物町

孝行者

同領 博多彌町

孝行者

同領 博多物町

貞義者

同領 宗像郡土佐村

忠義者

同領 那珂那桑院村

農業者

同領 嘉麻那赤毛馬村

孝行者

同領 博多津佐所町

孝行者

同領 博多稀田茶町

孝行者

同領 福岡城下藥院安字橋

孝行者

同領 那珂那桑院村抱大路岩

孝行者

同領 福岡城下藥院町

孝行者

同領 福岡城下中名清町

孝行者

同領 同領

町人日産錄

盲人

町人吉野茶屋の下男

町人巨賈宅

町人日産錄

盲人

百姓深谷後家

町人小山仙卷下男

市云清

安永六年

歌仙

安永七年

仁助

安永七年

傳七

安永八年

源七

安永九年

綱林

天明元年

之ん

天明二年

又助

天明三年

市七

天明四年

為吉

天明四年

源六

天明五年

太作

天明六年

小七

天明六年

鶴吉

天明六年

告松

天明六年

告松

天明六年

告松

天明六年

孝義錄卷四十三

五

孝行者

同領 福岡城下湊町波戸場

町人松名市三梓

萬吉

天明六年

孝行者

同領 福岡城下湊町

町人紺谷吉向

松代次

天明六年

孝行者

同領 博多王居町

虎吉身

虎吉

天明七年

孝行者

同領

町人後吉梓

吉吉

同時

孝行者

同領 博多須崎町

百姓安七次女

金若

天明七年

孝行者

同領 赤像於本木村

百姓

文次

天明七年

孝行者

同領 上座於星九村

百姓守平次娘

文次

天明七年

孝行者

同領 志摩於志田浦

文次

天明七年

孝行者

同領 福岡城下材木町

町人根津吉梓

磯太郎

天明七年

孝行者

同領 福岡城下大二町

町人建登

法助

天明七年

孝行者

同領 博多濱小路町

町人良廣賣孫平梓

磯太郎

天明七年

孝行者

同領 博多濱町

町人吉登

仁七

天明七年

奇特者

同領 上座於古堂村

志田百姓

持岩馬

天明七年

孝行者

同領 志摩於取越浦

商人坊屋馬塚家

上免

天明七年

孝行者

同領 赤麻於大隈町

町人平之輔作

孫作

天明八年

孝行者

同領 同領

孫作

丸

同時

忠義者

同領 早良郡西形町

孝行者

同領 福岡城下西町

孝行者

同領 博多土居町

農業少籍

同領 嘉麻郡有井村

農業少籍

同領 嘉麻郡佐志村

孝行者

同領 早良郡姪濱浦

孝行者

同領 同所

孝行者

同領 那珂郡志賀橋

孝行者

同領 同所

孝行者

同領 同所

孝行者

同領 博多奈良香

孝行者

同領 早良郡姪濱浦

孝行者

同領 鞍手郡上領野村

孝行者

同領 博多府子町上

奇特者

同領 鞍手郡上領野村

孝行者

同領 福岡城下紺屋町

孝行錄卷之三

町人掛巻下男

次右衛門

天明八年

町人紺巻市之清

三右衛門

天明八年

町人長七

伊勢松

天明八年

百姓

惣七

天明八年

百姓

赤吉

天明八年

町人青賣市郎次

市松

寛政元年

同

好松

同時

住持

利之郎

寛政元年

町人

市右衛門

同時

同

市郎次

同時

町人青賣市郎次

富吉

寛政元年

攘師七右衛門

庄助

寛政元年

百姓

庄吉

寛政元年

町人浪治

権左

寛政元年

百姓太作

五郎

寛政元年

町人髪結

左吉

寛政二年

○孝行者

同領 糟屋那松崎村

○孝行者

同領 赤麻那細分村

○孝行者

同領 遠賀那伊左座村

○貞美者

同領 志摩那田尻村

○風俗宜者

同領 宋像那宮司村

○風俗宜者

同領

○風俗宜者

同領

○風俗宜者

同領

無田百姓村

天二

百姓

百姓半作法家

庚辰

紅辰

組辰

組辰

小作 二十七歲

寛政二年

熱次郎 甲九歲

寛政二年

用作 五十一歲

寛政二年

七 三十一歲

寛政二年

忠右衛門 甲四歲

寛政二年

善左衛門 五十二歲

同時

徳七 四十二歲

同時

弥次郎 三十八歲

同時

惣百姓男 四百六十六人

同時

差 四十八歲

寛政三年

乙 四十一歲

寛政三年

源次 六十歲

寛政三年

幸八 七十二歲

寛政三年

与市 三十八歲

寛政三年

善五郎 六十一歲

同時

善九郎 五十歲

同時

旗師

町人大工竹屋

百姓惣助

百姓四郎次

法丞

組辰

組辰

風俗宜者

同領
同所

風俗宜者

同領
同所

奇特者

同領
遠賀郡清津村

奇特者

同領
同所

奇特者

同領
同所

農業家

同領
同所

風俗宜者

同領
遠賀郡系村

風俗宜者

同領
同所

風俗宜者

同領
同所

風俗宜者

同領
同所

孝行者

同領
赤麻郡下山界

農業家

同領
黒田甲斐吉領分
在領郡平本村

孝行者

同領
赤麻郡上秋月村

孝行者

同領
秋月郡下上町

奇特者

同領
赤麻郡平本村

孝行者

同領
同所

祖

祖

祖

祖

祖

孫右衛門

同時
慶長

二百五十人

同時

五十人

同時

次玄

同時

長七

同時

二百二人

同時

伴助

同時

与助

同時

忠作

同時

百六十八人

同時

助七

同時

格次郎

同時

惣五郎

同時

佐左衛門

同時

六之郎

同時

名不知

同時

赤麻郡平本村

赤麻郡平本村

孝行者

同領 秋月城下上町

孝行者

同領 卜座那山見村

孝行者

同領 新須那高田村

孝行者

同領 新須那栗田村

孝行者

同領 卜座那堤村

孝行者

同領 赤摩那東千手村

孝行者

同領 秋月城下今小路町

孝行者

同領 秋月城下中町

町人

無田百姓

百姓

無田百姓

無田百姓

百姓

盲人

町人代物

甚平

元文三年

北平

寶曆六年

甚六

寶曆八年

長作

寶曆八年

孫右衛門

寶曆九年

彦平

寶曆九年

勇作

寶曆九年

作平

寶曆十年

孝行者

同領

孝行者

同領 新須那下浦村

孝行者

同領 新須那下浦村

孝行者

同領 新須那持丸村

孝行者

同領 赤摩那千手村

孝行者

同領 赤摩那東千手村

孝行者

同領 赤摩那東千手村

孝行者

同領 赤摩那東千手村

仁平

百姓十九名

百姓

百姓

無田百姓

百姓

百姓

百姓

作助

同時

仁平

寶曆十一年

甚八

寶曆十二年

又六

寶曆十二年

仁平

寶曆十二年

甚三郎

明和元年

甚七

明和元年

七平

同時

孝義錄卷四十三

○孝行者

同領 秋月城下上町

孝行者

同領 秋月城下中町

奇特者

同領 赤摩郡馬見村

奇特者

同領 赤摩郡馬見村

孝行者

同領 秋月城下魚町

家自懷者

同領 秋月城下今小路町

家自懷者

同領 同所

孝行者

同領 赤須野栗田村

町人大工市妻

七人

同領八年

町人紺屋

後次郎

同領二年

百姓

孫四郎

同領二年

百姓

差之郎

同領二年

町人

和年

同領二年

町人水車搥茶屋

惣三郎

同領八年

惣三郎中

惣五郎

同領

百姓

宅次

同領八年

孝行者

同領 同所

孝行者

同領 赤須野栗田村

孝行者

同領 秋月城下中町

孝行者

同領 秋月城下上町

孝行者

同領 同所

孝行者

同領 秋月城下魚町

奇特者

同領 赤須野栗田村

奇特者

同領 同所

百姓

孫若志

同領八年

町人借石屋

出次

同領二年

町人

土佐助

同領六年

土佐助才

旁吉

同領

町人茶助才

武吉

同領八年

百姓

平田次郎右馬

同領二年

次郎右馬

平田甚十郎

同領

孝行者

同領 秋月城下今小路町

○孝行者

同領 秋月城下今小路町

町人 髪結

利 茂

歳不詳

寛政二年

徳五郎

歳不詳

寛政二年

町人

奇特者 彦一

彦一ハ宗像郡田隈村乃百姓あり父の世にあり
と見人より米を借上げし事ありか久しを
とたりのあてとておくさるるに痛くうせぬ
そのころ彦一ハあつ初くしておる事ありとも
あつさうりしハ生長のほあつとさう及ひて久し
くさうりし事と梅おけし入して米のほに
いんせつしむしハ父の身しにせありてそこ
あつりけつからあつし事ありてうせぬ
あつりしとあつりし年月より事とさう

たり成らざるや、
 らも、
 是と、
 て、
 事、
 志、
 ひ、

領主に、
 ありと、
 事、
 事、
 事、
 事、
 事、
 事、
 事、

孝行者こや

こや、
 若、
 の、

の後に程にり書くべしとのよきふいふいせむらん
と主人のいかにせむる年季をも給せむら
かきとくに十七年と種く二十歳より多れに
ついでひるひるいつむらうともあへんよは
くてその安堵を定めぬと父のいかにけともあ
てもあへん月を送ぬる事れあけり
長きいよとよと孫ひ出に主人の年終りる巻ひ
とさけくやうくよんとあがり今更儀よいとおど
らふみ種なるりさうかみ儀乃月の代業とつての
あへんいさるくその頼ひるあまのいかにい

こやの種流といふ所にあつた人のありたるは
どのへありあつた儀に種るくいさるいかに
人よとくに名くいかに女のいかにあつた男のいかに
とくにいかにのへ事れ事れありとくにいかにい
いかに人くも主人よにいかにいかにいかにあつた
とくにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
とくにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
種流乃業といかにいかにいかにいかにいかに
とくにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
人よとくにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

いふこととてさういふに主人もその志よめてる来
賜さつるにゆひの代乃兼と二儀ありて後
つれいしてさうけせよとてさういふれとけい
詔凶兼ゆくとそれ兼とてさういふもさうい
ふもさういふにさういふけいさういふとさうい
と孫よまよいにさういふのうちにさういふに
貯とさういふにさういふもさういふにさうい
ぬをさういふのさういふとさういふとさうい
きりの母のさういふとさういふと父の娘のさうい
たのむとさういふ者もさういふとさういふとさうい

めくぬくれよめやうにさういふに父乃八十にあり
ておいふとさういふに許時も側をとる事さうい
うと只およのさういふに船夕乃のさういふとさうい
たさういふ或は漢邊に出く海藤とさういふにさうい
勢とさういふ又さういふとさういふとさういふと
やとさういふとさういふと父の志とさういふとさうい
一程の道橋乃のさういふとさういふとさういふとさうい
つとさういふとさういふとさういふと父の志とさうい
りおもふのさういふとさういふとさういふとさうい
病とさういふとさういふとさういふとさういふと

新編金巻四十三

十四

二つは遠くによりは山も海もして遠くはにゆく新
 とより燧燻を播かとしてその人らとさといそい
 けり父のうつらひの消渴といへる痛めくを筆に
 食とてふ事十二と夜湯水とのむ事二十四と夜
 に及へりあけ言たえく杯ありぬらりくととや
 いたのむら夜食をも日すきて側をそれしは
 飲食とてふめく片時も既渴のらりくとに及ては
 消暑とて付の抱をあつと涼くゆらりて先をさ
 ほとは着くつる夜をも父よ着勢そくその月ハ裕
 ひらととあらしあつら手と接さるとり是とよあ

しくあつらして心抱せりこや家に入りて父よ
 つらと事とそくに十年にあまのり一か三年こ
 あつらと為よあ日毎乃孝事のわも父あり
 こりあつら父のこやにむらひふらして親を養ふ
 世のあらひよしてさもあつらんとあつらる
 りのこつらよ女の美をひく我老病をそこつとめら
 それ孝け乃保くせつらあつら事あまの病く彰ひあ
 るへりつらけりもけ地の我神乃その志を感く
 母よつらりて我をあつられあせりよや年と相傳つ
 手とあつら涙を流して悦ひく親よふらとつ

入まへくいつとも袖やぬらせりとそとせむとも父
ハ病まうりてつるよ貞享之年れまじりく
甲のぬこやうさうりたるけこぬらしくと西光寺と
いふ寺は僧をのこく神にち法事とらりてを
りしめ一周忌又ハ之年忌といへりにも僧とまねた
てたよとてつる僧書といへりる月丁の忌日
よハ齋料とくまありひハ粟ふとと西光寺に物
しか僧も彼り劣る窮とあハ建こぬとたかしと
ぬらせりてつるけくんととつる事を用あり
某ういふも茶湯をいへりてつるけくんととつる
けくともこれハ父よとてむるよとあれれ僧よあり
とらにてハあつたつとつるけくんととつるけくんと
高らに墓にも一基乃石塔とそとつるけくんと
る事いふこやうに皇教の爲とてたかくせとて
才の辛若といふとつるけくんとつるけくんと
とてたかくせとつるけくんとつるけくんと
切のいふとつる事とつるけくんとつるけくんと
身に及とつる孝外とつるけくんとつるけくんと
ふ四十歳よあつたれとつるけくんとつるけくんと
まうりてつるけくんとつるけくんと

けくともこれハ父よとてむるよとあれれ僧よあり
とらにてハあつたつとつるけくんとつるけくんと
高らに墓にも一基乃石塔とそとつるけくんと
る事いふこやうに皇教の爲とてたかくせとて
才の辛若といふとつるけくんとつるけくんと
とてたかくせとつるけくんとつるけくんと
切のいふとつる事とつるけくんとつるけくんと
身に及とつる孝外とつるけくんとつるけくんと
ふ四十歳よあつたれとつるけくんとつるけくんと
まうりてつるけくんとつるけくんと

お新を嫁とてしむと媒とらる者もあつりしや
 幸若くくつひうらうらま事のとなり人お徳不
 うへうらハ方のうらまひも自由あらせしで父の墓
 まつりとも心のまににひくゆきうんハ本意御
 事こつけ御さうりく福よ後の媒とらる人もまこと
 うりこさ此地乃福ハ但弘乃往來に揖せしむしる不
 るれハこやか孝り乃化まよもさことしよあやと
 さうく穰人の為福ありし事もあつりし元
 福二幸としに不乃每指より初へ玉多れハ領主
 もめでく感称して褒美をさうせふさうさうり

の人たぐおもあつれとを想ふかといははるるり

奇特者九郎左衛門

九郎左衛門ハ柏屋敷尾仲村乃百姓也九郎左衛門子あり
 いとけること博多の魚あはる者此養子とら
 りしハ養父世とありせしハ実父のあよとけ
 道と田畑とくくあまらしくこれハつるあ魚商人
 とそありけらゆきとつこに往來してつこ
 らぬさうく高貴にんとせせし福よとらえんハ
 もやうくじゆさうりしハ福夕乃食事ハ雜穀
 とのこ月あつるまばくつと夜服も年く個人

幸くかよの事ハ毎ふせくあらんことなるもの
 ありいあらん秋冬の間よりしりて迄はほと
 んどいなうとこそ者あれは新あつとせしあつて
 ま夏のありしあつととのあつた方におもあつては
 あらく幸く来奉のまうをあらくことふあつと
 人くにとそのあつとをあらくを産業のえしと
 人をみることふハ余下の村とくもま後あらく
 ことくことと力ある者のつこのいおつとひら
 けつとくは乃空形民よめ力あることおよハ是と
 ことと施しけり地宝二年といつとあつと凶年

かりくく六親三友を出して村乃うら或ハ隣
 村の仇人を救ひて後の凶年にも銀一貫五百目と
 米六十俵とて施しけり道に五穀の落こりて
 こととあらくことと流とことと泥とこととつりても
 いあらつと食よとらせ漆ととる時ハ是と
 ことと或ハ是と板をこけ渡して橋とせり或
 時善父の墓糸とことととく播多の選擇とことと
 くに折ぬ寺に修すの事とことと用度とことと
 こととていよこととのいよとことととことと
 其料をりよとこととやりぬとことと寺持のよとことと

あまのあまの人のいひ傳んてをいひて名
とつてうらなひてめい誰と志る人ありしに
いふのつら九郎左衛門の事とそいひ傳へける
幸若と者とをうらなひていふもそのいひを
朴よして必とさしひよ急るものゝ事との
事ら此極權乃難難乃事とゆめやうよ
思ふこととよしれ人その病に感るに感
けりや屋りに被りけりいふうつり人
儉約をつとめし村らも賑しくと見え
一奉記録の事種しよとて父母と孝父母

との其後といのうらなひてあまのあまの
くて日牌といふ物を立中の一族乃為りも
月牌といふをも立中との父と孝父との債多
うらなひて其金の目とをいふ事とのこ
思ふこととよしれ人その病に感るに感
宮せし事と其その宮居と信する者よとて
く此根をあまの古々神樂といふ事とて
せ末社の神といふもあまのこの事とて
ふれ九郎左衛門の八十回奉りて元禄十四年
これよりとせし事とていふ事とていふに

孝義録卷四十三

数里の道と幸しくとせよと申すく薬やらの物を
 用ゐし事あり是を以て名をたすれと云ふなり
 若しよの英食を好まると云ふを以ていふにせよ
 可しと云ふなりけり領事よ申すけしは是より
 四年はうりさ記よ褒賞ありけり地八玉の家
 志隅田□給地あり同日と云ふことく此を云ふを
 ともめ申す村乃百姓をよむといふ酒食をよむ
 くと後九郎左衛門よ褒賞ありと云ふ事と云ふ
 せ村人ありといふ事も被りけり鏡よせよかといふ
 事と云ふてその人けり九郎左衛門といふ事と云ふ

多しと云ふ者さうと云ふ必立とありてり此場也
 けりといふか或に人々此のひよといふや一鉢也の
 ころさうといふか或も被り教ふ感しうつと云
 風俗と云ふいふか或も被り教ふ感しうつと云
 或と云ふれと死しての故一毫の糸と錢とを被
 たりといふなり

奇特者孫田部

奇特者同姓

孫田部ハ鞍馬郡水原村の百姓あり生質貞実にて
 て奉貢詔夜をつくと勸め又老くる母に二人

て孝ありては母の目くその服田村に嫁せし婦
 の子ありては母子ともに離れせしむるを母の家
 依那のふ木村よりいりてせしむるを母の家
 まらぬとて孫田村の家よりいりてせしむるは
 娘の養育も遂ぐるはよき事とも又ふ木村乃
 依某の娘よき事とせしむるは代をいりてその
 事知とつり時ありては孫田村よりいりて其の代
 とつりのよき事とせしむるは母の支うけ人として
 も嫁せしめけりて婦の世とありては娘の元禄

九年離れせしむるを孫田村よりいりて一年の
 の事とつりては母の世とありては孫田村
 乃其の事とつりては母の世とありては孫田村
 らしむるは母の世とありては孫田村
 に孫田村の事とつりては母の世とありては孫田村
 を母の村の事とつりては母の世とありては孫田村
 やりては母の世とありては孫田村
 孫田村の事とつりては母の世とありては孫田村
 といつるは母の世とありては孫田村
 は母の世とありては孫田村



代を以て納めまいらまへし十二月十六日迄おそ乃
ゆりこれとやらうらんをひおけしは役人も松久
あらんといひ一故孫田郎と嫁らをと出でて事
の子細を為福くんに孫田郎はさいつと後彼を管
物まゝに出せしに方うけの時なりしゆと其方
乃代をとりたあふるかあく彼ら母の娘のまうりつ
くはひ知 息の人もあらせけつと福く離縁
よ及びこれハ穢し面目あると事なうりし離縁
乃後も又まゝせしむるひ孫田郎とてうりにせしと
あら某の死にこれハ年を買来りて農業

のうりうりし事なととらうりたり被く
はあくとかり世をさうりぬは今ハ某ハ年と
賣めとも被り方とらうらせうりしといひ今に
嫁ハ年以思あつと叔父るれはけ福とそらよ志
く此事とはう離ひつとと交しつとあもと
えはこれとも初およして父母よらる連係さ
事の旨とらけこれハ親あもとらうらぬ福も我
とらうせありととらうらふらと孫田郎はうり
へうり海に後とらうらんといふともこれ能大
よいふるうりし事なととらうらあといふに

海に後とらうらんといふともこれ能大

よいふるうりし事なととらうらあといふに

此月のま葉よりのよとらもけつ月の夢くさ
 事ありくさつらのもも富夢事やめくはく
 ぶと夢のうさりあらそいしく其座あるあふ
 村のうらの人くも被ホ志の海に感くは
 ぶつとくく居るうさりやうく被九の年貢を
 ちや島と買ゆる平次郎ありおさむらふく
 初つてりけふの娘とて身とららしめその方
 の代をゆく島のうけくえくしふと裁判
 しくれ平次郎も被ホ志と思ひたりたそ
 乃ち孫四郎の島とくく價がつふりありさ

ことさふあつせいつのふへくく娘志とささ
 んとせくかびのく領主にりさえて同去年
 正月の事ありしく孫四郎平次郎と名を長
 百姓と福岡の城に呼出く先孫四郎の娘と獲
 弟して兼そことくくささせいつきも婿嫁乃事
 とらいつり終月の安堵とさくくむへくか
 海はくさり孫四郎の娘のさうさるらと農育
 してあふれと海く者く農業にさうさる事
 乃と獲弟くく年貢の未をさゆり平次郎
 にく被ホ義理あると感して島の價とけ



さらき事や愛とらるるにせむとせむとそ久しける
孝行者体白

陰陽師体白ハ孝賢那中系村乃人あり父の名
をいふといひしうめの名ハ父子ともにかち兼つとを
いひけり一層うらるひよそくともやとゆくを
く体白もまゝいその業とつけりさく國中の人
よ信せりまこと体白生貨篤実にして父一層
につくくま孝也うく領主の新橋西にこもり
し時二枚之日りれたうりくあり外ハ父の世
とをよる海くゆれ側にありと志すくも

もまろく事なりゆき若きより老にいつか
まろく嬰子の親を志すうかゆかおもさうい定の
寝ねとやゆひつこハ枕とをさくいも終とそ
の寐さめにあふ時ハ慈に寐ふとらひ終ふまじる時
ハ心そりに寐顔とやゆひて終とらふ怠ることあ
ゆりくハ一層もあこ彼をいとととて其心抱
と終とらひ今り体白年若きより父の心とよ
るまろくむら事とてのまじり終とらふ
そめよもそのらふたうひし事あり賣トと業
とよとれと耕作をもいふとに或日隣村の人

父とやらの集て田植の節にまくれとせしと
 ことしうらほも父の豊前乃小倉にせとせしと
 出くく六田植とせしとされハ海を渡りて
 里のふきにうらふへしとせしと小倉あまの
 う一里のふきにうらふへしとせしと
 山坂乃うらふへしとせしと我子随ひま
 へしとせしといひけるよ体白ハ父ひらり新ん事
 のふもらうとせしとせしとあまのふれハゆり
 遠いよとせしとせしと父のふにせしとありとせし
 つるものやとせしと人せしとせしと父にせしとひ

初しとせしとせしと後父にせしとせしと七十七日の
 せしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
 せしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
 にせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
 せしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
 どのを唱へけしとせしと人のその孝行とせしとせしと
 ハ孝子にあしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
 せしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
 ひりりせしとせしと七十とせしとせしとせしとせしと
 のしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと



ありと業として國の陰陽師の長ありしは後
 八年の病多ししらく定生村よまある月廿民初
 にその長をゆはりて賣トれ業をやめ唯耕作
 の稼をのこつとめたり為陸より二人あり兄を
 惣としてり父についで農業を勤めたり中乃
 近江とせり民初はつりとりけり海と陸陽
 師の長とするもり休自りりお傳へり為陸も海
 と孝子ありしは父にけり父の孝子ありしを
 せり年一にさされしりそは彼もあつて父の
 悦しむるをさしり樂とするせり初めは會事

せりむるも二親よいことさうに相しと乃建
 下初とともにな食をうり初も乃の安樂を
 たりたりさるもとり書讀事を好む耕作
 のいとおあまは手に巻をとりまは悉とりや海
 必恩をとりされと貢物を納ると年とふ徳人
 にさだをり親戚の懐びありし初にあつて
 と海く村うちれ人よ對して禮儀ありたりは
 福よ農業に力を有りり事を家の教へてせりか
 ハ唯その村の人のとるは隣村乃若にりりあ
 其志乃私るされ感して風俗とるよとせり

孝義録卷四十三

二十一

とをばりし領主に申元けし農人の二つととも
もるもへしと老なりかと賞詞ある元禄十一年
の秋彼よりある中系の新田と後とせむく
若りどつらぬ法人も厚く教訓せよと法は
ありと

貞義者源六後家

遠賀郡本守村の百姓源六は妻ハ元禄十一年の冬
年若くしてやめとがむり男子二人をうめるか
兄ハ十一歳弟ハ二歳なり是ハ同一郡尾崎村に
しとあり父甚九郎といふも此その艱難をうし
煩いとこのまは婦子ともあまこころつて是あり
てつくるうへにらく後妻をむりとも稚さものと
と妻育はらるしそらけむと年こひひ多れとあ
まにまの事や極こころけりし父母の
ふさやらんしあむらも妻育のこめられ
いふのもはこころむらひとすし子れ生長を
そらめまの田畠を食うはくしとあむらに
とそめかハ彼も力をうたはけりやうにも
てりしけむらむら目し村の末次郎といふ者
乃家よつと居し去之所といふとむらんと

孝義録卷四十三

せしにせんころくやぶひんん十二月十日乃
 夕の猛く死しぬ願まその貞名と感貴く
 て予らも見事に暮そころくよあしよく當分の
 事なるといふまにけ田島ハ村人ありりよ
 て年貢のあありと奉くよざくし彼志の
 生長れ後田島くころくよあしよく當分の
 事なるといふまにけ田島ハ村人ありりよ

孝行者正助

正助ハ宗像郡武丸村乃産あり父と正之郎とい
 へり多病ありて田島たぐりて宅地もあけ
 まハ人の家と信いしころくよあしよく當分の
 事なるといふまにけ田島ハ村人ありりよ
 紺屋乃仁右兼つゝ妻とああり正助人の下郎と
 たりて父とやしあしその路業とらさ
 いにせとを月をつまやうよしてまくころく
 ねはとらくく土地と来て家とらさるゝ正之郎と
 恒せろり母も人よつゝこれらあよのつぎあ
 ぬまのよくくまにはつゝまあやうあけな
 らとまのやめら時ハあし福ん後には
 を養ひこれ正助もあしをわたりころくよあ

小舟をさしつゝはる樹を山壁とせりて父
 をやてあふさるりつゝとさうけり廿二歳あり
 にして母法にもにまふもあやしく田代二倍
 なるの買もとめく耕作く今の少成業く
 け建と親の好めり相調くほめまことりつゝ
 し父より酒を好らば日とふまはさつゝ買
 ぬく種も酒をのあらくそその孝心も感
 せん價もつゝの事あれは今の酒のさほく
 あつゝよへきほくに必後を指するゆゝつゝ酒
 かたふさつゝけあつゝと乾つゝつゝおつゝり
 かし

婦人ひま家よあつゝとさつゝとさつゝとさつゝと
 めけりかの酒家のあらくその後正助の来りつゝ
 とも正に婦人くさつゝつゝにるゆゝおあひつゝか
 ハ何とく久く我家よあつゝとさつゝとさつゝと
 とさつゝとさつゝとさつゝとさつゝとさつゝと
 ちりさつゝとさつゝと正助あつゝとさつゝとさつゝと
 に二町ありありあるさつゝとさつゝとさつゝと
 神仏と定地かつゝとさつゝとさつゝとさつゝと
 あつゝとさつゝとさつゝとさつゝとさつゝと
 も又よの河辺にゆつゝとさつゝとさつゝとさつゝと



孝の事なりしは或時母のあはれなるに
 くるくべきをばしりては湯をたぐひ
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては
 る事ありし母人のあはれ湯をたぐひ
 りし事なりしをばしりては湯をたぐひ
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては

といふ事なりしは百姓の親に
 して疎略するもれありしをばしりては
 に正助の父母を祿するに
 る事ありしその事なりしをばしりては
 親につらふ事なりしをばしりては
 腰にたぐひぬぐひては湯をたぐひ
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては
 ぬぐふも手はさかたにぬぐひては

ある声高く泣いて事あり母れいなるは泣
 せとらひるるにあやゆりて父の杖を踏くそいひ
 けりをよまうふ二親のいりあらしき事あまは
 はその間よあまのいこまをあらせ涙をあらう
 て祈まを是非といひておとらうあまは
 父母もうれうふ威しいりて祥て笑ひそのは
 へくの公夜よとらうは年よの貢物をも入り
 先よ納免つてあまのりあまは父に酒買して
 ぬ父の六十歳にして中風乃病にうりていふ
 ふくんと用あらははの業に力をとてて

ふ抱にをよとら耕作にいとあまら
 朔夕乃食事いあらう酒してとせうりにも
 その勤めをく事か父のりあまは
 厨よゆくにもあひの娘のもとにもうりくゆん
 こいふにふ六町乃とゆさのせりか帰るら
 よも時をたえとじひよあひてあひらうと
 ある姉妹のもとよとらに涙を流せし事
 まよ姉あやとらひるれいふ父を背お
 ぶる地乃若うりもふやとそれかこふあまは
 ひてくくあまのあやとらひてあまは



漢乃こほきつこそひひる妹もほこ先乃也
 ひよるらひて孝弟のふあやうの賢さ家
 嫁せしめと月とよいさか酒音おと持事り
 て父ぬと慰光るり正助こく二親と老しうや
 まよのこるるはさへてれをいひ人の及物とこ
 にあうさうこふやまひ人をあられと
 よしてあつにも傷りこをいひ人の名出を
 こくこよよとの事乃こくひひる法子に
 身をいへは人乃をあやうり或は公夜よは
 らう者乃さうもこ事のあらか又はその

若といひ公夜をあやうしこををこれ公の
 の田地をうけ耕し諸夜をつとむる百姓乃
 乃あうこ事ありとく益ををいひ人あ
 かりて出つてあし種よほに公彼ホも正助うり
 正にもらりてその勤に意うさうりつと
 疫癘の病流行して村中の人多く其病に
 里しこいれ人うつりそあんこと怨むく
 病家に出りものをおりしと正助あ
 もいとふあかくあけられその家に往来して病
 用をたしけ孤獨乃ものあこさうら醫者乃も

とよあひつて業と相く糧とほくそ者あれ
 業とくあこへ死とる者あまの葬送の事とい
 とふと後りぬ或者正助の家より二里ああり居
 たりとる池田村といふ所に住る盲人の妻なりや
 たりけりか物とて可れ亭に無かりり一節又
 ぶらもえ石といふあ乃あるとてうけまひて我村
 よりハ種をく耕みとる目志おの求るよきあり
 たりかといひいさこえくに正助といふもを記す
 あり種ありとてのておとさんといふもあり
 くと父ハをの病に事志ひて正助とてその約業

とけさうんことたりやうりこく或者のいとあ
 る時よのわりして思のもえ名とたりあつり海こ
 父のう後ふとをを何ひて盲人のあらよとら
 たりは子に門辺に來りておらふ者のあるにむ
 りくく人と事なく或時薪とあひふりり入る
 るよくと食にひあつりその薪ともくつとて
 ぬせり正助いらいおらうとてくくゆる記事
 とるいさうりこらよきさもさけくくれは先火に
 あつり種とくくとくに焚火とまうけくといり
 ぬふて正助ハ薪と伐らよまの山に種をぬく

孝義録卷四十三

三十三

平るをほりふも人どあしうらふくくふの由を
 せんじあさといもあさとおとささく其骨折を
 祿さうひかり奉賞やうれまのど松つまよひらふ
 とさう誰しもその馬にのりてうらふらふと西助
 いまあさといのうらふと物ともまにひまをうらふら
 物りぬらつまのくれらうら馬にのりうらや
 とらひしにるはもるは事とらひあふまうらて
 なるくれぬに重あさといとせうらうらさにもあつ
 くせあさといと誰うらうらけうらうらあといとあ
 まうらうらあさといとあさといとあさといと事ありあさ

いふこれにいづきもそのえきに服し志さうひて
 うらふよのうらうらうら霖雨早魁の折やうら
 うらまをうらうらけうらに西助うらうら氣あもあ
 うらうらのまのうらうら稼穡ようらうら天余にこそ
 ありうらこれ水早の天よりあせうら災ありうらうら
 うらうら事にあうらとそさうらうら於領にま
 西助うすあうらほらうらとあうらうら時その村夜よ
 うらうら折ああそのうらうらほらうらに出ま町うら
 を隔てあうらけよまをうらうらうらうら村のう
 られあうらうらそのうらうらに及うらうらあうらうら

多ふことにはあつたにまをまり腰をうめておこを
 うよめらまひ非人を見食といへどもゆかふとさういへど
 ろそつにせさうりしういさし免があつたりの人しく
 せうらちうとそまらあひしおほまの目れ人そあ
 けひよらうさ事しく一村の風俗もたをりそり壯
 年の時妻とむしへし女の儀をいさるふりま
 のよらるひろ尋ねあつたると入つくれそまら
 りらよらうとさういへどあつたひらひらさあにさ
 へこの心助のあましくお親のやうさひくさ
 ともうしうらあせんすうさうなと稱んこ後

にいひあつて男のあよとらるひらさう調なむ
 とつらあひゆさうそらんけりさああささ
 じうあさ母のささめしうけりけりけり
 父母の老衰へく解年とくまふれは娘たうさを
 名孝とらとといへと妻あつたあさ子あらん父母
 妻とやうさう稼穡よいとあさくどのつら
 名孝にありゆらんもとさうさうあつたひ妻
 とじうさうい父の正徳元年と歳のとさうらとく
 てうせよのあさう十八年のあひくその女抱に
 へよらさうと事しくひさう後のさうも細やうに



しく同くこの年の六月、領主もそのめいひと褒美
 して、若くともくどあつふるのこころは、
 の八月、武丸村の田地を賞ひさく者あり、買取
 て、正助にさうばへくあつへ、領主よりつくの
 んと、不の衣、長百姓に、下知ありし、おまへく
 の福と、業、いぬき、今、老母と、業、ふと、ん、あ
 くる、う、い、何の、あ、あ、く、さ、ほ、ま、く、い、さ、う
 屋、も、この、さ、い、の、賜、お、い、ら、れ、と、い、う、う、い、
 しく、い、さ、う、さ、う、祥、しく、い、ら、れ、い、つ、る、に、その、事、や、う、
 しく、同、く、七、年、と、り、い、よ、い、正、助、も、い、ら、れ、い、妹、の、子、も、い、

熱一といふるを、むく、う、う、て、業、子、に、せん、と、を、預、ひ、出
 しく、お、お、う、う、熱、一、う、人、の、下、知、と、あり、て、居、う、う、い、
 と、別、業、の、より、業、を、こ、こ、く、と、い、う、あ、い、く、と、れ、う、
 身、の、代、と、つ、く、の、い、せ、正、助、の、形、と、い、け、さ、せ、う、り、同、地
 十四年、い、母、の、齡、八、十、に、い、と、あ、あ、い、正、助、も、い、ら、れ、
 中、歳、あ、う、い、か、う、を、と、こ、う、う、う、う、て、その、孝、義、を、
 て、あ、い、さ、く、業、い、い、れ、い、母、も、い、い、業、を、い、く、と、我
 子の、や、い、い、の、ま、い、る、と、い、う、い、い、い、い、と、若、く、
 より、艱、難、を、経、く、る、者、も、い、衣、食、や、う、の、い、と、
 り、い、事、も、い、う、い、い、い、今、年、の、ま、い、の、い、業、と、く

孝義録卷四十三

三十一

しく福よへしと願まふりおはるるは後西助
 と福島の城下に居出しそれより田地之候八畝の
 不をたうく奉貢せりてそのおひをあらり
 中この母の喜ひのりしとけしとて奉せりてと
 せりて西助はるる君の由ある事ありて
 ら百姓の身乃さる事ありて後につけ
 て貢せりてとて福ひのりしに候
 事ありてとて西助はるる君の由ある事ありて
 おはるる事ありてその後西助はるる君の由ある事ありて
 りひありて時武丸村もそのりしに候

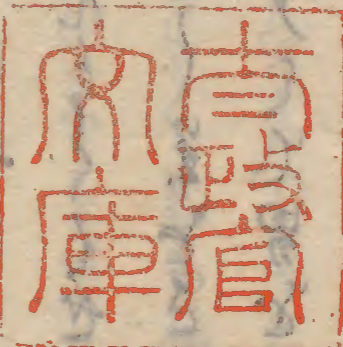
田比よのまじりしとてつ子のりしに候
 りれり孝心の天なるものりしとてとて
 こと感しありて西助はるる君の由ある事ありて
 納めし時をりしとて君に奉る物ありしとて
 美しき事ありしとて君に奉る物ありしとて
 へをりしとて君に奉る物ありしとて
 ひよ西助もまじりしとて君に奉る物ありしとて
 て物を候い送せりしに候し村のをたふして
 そまげり西助はるる君の由ある事ありて
 らぬ祓ふし中としひいりしとて君に奉る物ありしとて



事なりし一二日のうちに入るといふれは第一俵
 一ありとしよふに左巻もうれう事あればいひの
 物ももろく安んじ事とらんか一あこへうらま
 正助の男の家よ指りて困窮のあまうに左
 一あふらう人一その業いそむうらまの物よ
 一いせうて一も債もふももらわりの入道ぬ
 孫うらへひ業とせう一これふてきあくの事
 一をいそふうらま一いそむれに男のわらふ
 一いそむらうらま一もまの事ありうらま
 一いそあうらま一のきうらま正助のうらま一

一いそ事やせうらま一もきあへく声いそくわらうらま
 一いそこのいそあふあ一いそこのいそあも業をう
 一いそあふらうらま一もせあうらま一いそ債のうらま
 一いそいそ一業いそ一いそ一いそ一いそ一いそ
 一いそにうらま一いそ男のうらまにいそ一いそ正助
 一いそ業の業もこのいそ一いそか一いそ一いそ
 一いそあうらま一いそ一いそうらまの彼もあうらまぬは
 一いそうらま一いそあうらま一いそいそ一いそあ
 一いそいそ一いそ一いそ一いそ一いそ一いそ一いそ

男の羅もすはら



考義録卷四十三

